

配信先：大阪科学・大学記者クラブ、文部科学記者会、科学記者会

2026年3月11日

大阪公立大学

障害者アイデンティティ形成の鍵を解明 社会参加と交流が認識変化をもたらすことを確認

<ポイント>

- ◇3人の身体障がい者へインタビュー調査を実施。複線径路等至点モデル[※]を用い、障害者アイデンティティの形成過程について、本人の経験と社会文化的背景を長期的視点から分析。
- ◇障がい者グループの活動への参加、社会福祉サービスの利用により、自分以外の障がい者との交流が深まり、自分の体験が障がい者全体の課題とつながっていると感じる事が判明。
- ◇障害者アイデンティティの理解には、その長期的経験が社会文化的文脈と一体的であることが重要であることを示唆。

<概要>

障害者アイデンティティは、障がい者集団への帰属意識や貢献を含む概念であり、心理学、社会学、文化人類学などの学際的な領域で研究されています。しかし、一般的なアイデンティティに関する研究と比較すると、その知見は相対的に乏しいといえます。

大阪公立大学大学院現代システム科学研究科の田垣 正晋教授は、3人の身体障がい者へインタビュー調査を実施し、その語りについて線径路等至点モデルを用いて分析し、障害者アイデンティティの形成過程を、長期的視点から明らかにしました。

その結果、対象者はケア体制の構築、周囲からの視線、学校教育など、日常生活においてさまざまな困難を経験していることが分かりました。また、障がい者グループ活動の参加や運営、社会福祉サービスの利用を通じて、類似または異なる障がいを持つ人々との交流が進み、自身の経験が障がい者全体の状況や課題とつながっていると認識することも明らかになりました。しかし、時間の経過とともに、協力者は自分が関わった活動の成果に十分満足していないことも分かりました。ただし、協力者は現状を否定的に捉えているとは限りません。この結果と先行研究をふまえれば、障害者アイデンティティ形成の理解には、社会や文化の背景に加えて、長期間にわたる経験が重要であること、同アイデンティティには柔軟性があることが示唆されました。

本研究成果は、2026年3月3日に国際学術誌「Integrative Psychological and Behavioral Science」にオンライン公開されました。

※障がい、障害の使い分けは、学術用語や法制度における用法に準拠。

<田垣教授からのコメント>

大学院生のときから、障がいのある方々のライフコースを我が国の社会や文化、法制度から考えています。私は日本に生まれ育ったので、「日本的」なものが自明です。これを論文中で浮き彫りにできるように、海外で発表された日本研究の論文および関連動画を定期的に確認し、知見の深化に努めています。本研究が、障害のある方にとって、自身以外の障がい者との交流のきっかけや関係作りの手がかりになれば幸いです。また、政策担当や支援者、障がいがない方々には、「障がい者」と称される方々同士の活発な関係、とくに異なる種類の障がい者同士の関係作りを知っていただければと思います。障害者アイデンティティと障害者差別解消法等の政策は密接に関連しています。

<研究の背景>

障害者アイデンティティ自体は、心理学、社会学、文化人類学等の学際的な研究テーマですが、一般的なアイデンティティと比べれば、研究の知見は少なく、そのうえ北米中心です。また、障がい者関連の活動に関する世代継承性を用いた研究は少ないです。

<研究の内容>

この研究では、障害者アイデンティティ（障がい者集団への帰属意識や貢献）をどのようにつくるか、障がい者の方々が培った活動の世代継承性（人々が自らのなしたこと、なしえなかったことを次世代につなげること）を調べました。

調査方法として、質的調査、インタビュー等による言語データを数量化せずに分析する手法をとりました。特に、複線径路等至点モデルを用いました。このモデルは、人の諸経験とそれを囲む社会文化的背景を、長い時間経過から分析することに適しており、筆者が3人の身体障がい者の方々へのインタビュー調査を行いました。

その結果、3人の方々は、ケア体制の構築、周囲からの視線、学校教育など、身近な困難を経験していました。その後、障がい者グループの活動や会合、自ら社会福祉サービスを提供する事業所を運営することにおいて、類似または異なる障がいを持つ人々と交流するようになり、自身の個人的な経験が障がい者全体に関連すると考え始めました。これには、肯定的、否定的両方の出来事が含まれます。時間が経つにつれて、協力者は自らの成果に満足せず、後継者の育成をしようとしています。課題に直面しています。

今回の研究は障がいのある方々にとって、自分以外の障がいのある方々との関係作りの意義を示しています。それは、仲間意識だけではなく、考え方の違い、歯がゆさ、うらやましきなどがあります。障がい者の方々が培った諸活動を、次の世代に受け継ぐことの難しさを表しています。ただし、個々の方々の意思や選択が重要であり、障がい者の方々が障害者アイデンティティを持つこと、若い障がい者の方々が活動を引き継ぐことを推奨しているわけではありません。先行研究もふまえれば、障害者アイデンティティや世代継承性には柔軟性があるほうがよいといえます。

<期待される効果・今後の展開>

本研究は一つの見方を提示したものです。厚生労働省によれば、2024年の時点で、障がい者等の数は約1,200万人と見込まれています。これだけ多くの人々がいる以上、多様な考え方があります。今後は、より多くの方々、また、他のアジア諸国との関連を検討したいと思います。

<用語解説>

※複線径路等至点モデル(Trajectory Equifinality Model)

人の諸経験とその径路を分析する手法。人は、社会文化的、歴史的な文脈を生きているため、歩む径路は相異なるにしても、類似した結果（「等至点」）にたどり着くとみなされる。等至点までには、径路が分かれる事象（分岐点）多くの人々が経験する事象（必須通過点）が想定されている。この手法の解説の一例として、筆者による日本心理学会の Web サイトを参考。

<https://psych.or.jp/publication/world093/pw15/>

<資金情報>

本論文の一部は、科研費 基盤研究(C)「市町村における障害者差別解消支援地域協議会の当事者参加型運営モデルの開発」の成果です。

<掲載誌情報>

【発表雑誌】 Integrative Psychological and Behavioral Science

【論文名】 The Changing Process of Disability Identity: A Trajectory Equifinality Model Analysis of Japanese with Physical Disabilities

【著者】 Masakuni Tagaki

【掲載 URL】 <https://doi.org/10.1007/s12124-025-09953-0>

【研究内容に関する問い合わせ先】

大阪公立大学大学院現代システム科学研究科
田垣 正晋（たがき まさくに）

E-mail : tagaki@omu.ac.jp

（参考）

<https://www.researchgate.net/profile/Masakuni-Tagaki>

<https://orcid.org/0000-0003-0586-1486>

【報道に関する問い合わせ先】

大阪公立大学 広報課

担当：橋本

TEL : 06-6967-1834

E-mail : koho-list@ml.omu.ac.jp